

【ポスター発表】

## 社会福祉専門職養成における実習前教育に関する一考察 ーソーシャルワーク実習入門受講生に対するアンケート結果からー

○ 高知県立大学 二本柳 覚 (6983)

高梨 未紀 (日本福祉大学・4715)、鈴木 由美子 (日本福祉大学・5566)、寺澤 典弘 (日本福祉大学・5898)

キーワード：専門職養成、実習前教育、リメディアル教育

### 1. 研究目的

社会福祉士有資格者は2012年現在で約16万人となり、法制化された当時に予想されていた高齢者社会に向けた需要に対する供給は一定ラインを確保したといえる。しかし社会福祉士に対するニーズはより高度化・多様化が進み、活動領域は司法・教育などの分野にも広がり続けている。このような状況の中、より質の高い社会福祉士を養成することは各養成校にとって極めて重要な課題といえるだろう。

しかしながら、社会福祉系の大学に入学してくる学生は、ほかの医療系の大学に比べて社会福祉専門職に対する意識が必ずしも高いとはいえず、2010年の調査によれば、福祉・医療系に進む者は社会福祉系大学全体の46.4%であった。また社会福祉領域に対する適性について考える機会がないまま実習を行う学生も少なからず存在しており、実習に入る前の段階において、社会福祉職に対する自らの適性を理解することや、実習に向けての意識を高めていくことを目的とした実習導入教育は大きな役割を果たすと考えられる。

そのような中、A大学では実習導入科目として2年次前期に「ソーシャルワーク実習入門」を設置している。本研究はA大学が行っている実習導入科目によって、受講生の実習に向けた意識がどのようにみられたのかを把握するために実施した。

### 2. 研究の視点および方法

本研究は、実習導入教育としてA大学で行われている「ソーシャルワーク実習入門」「ソーシャルワーク実習基礎指導I」計10クラスのうち、メンター（実習を経験した4年生）を配置している9クラスを対象として実施した。調査期間は2012年7月20日に行われた「ソーシャルワーク実習入門」「ソーシャルワーク実習基礎指導I」の最終講義時とした。

調査方法は無記名自記式のアンケート調査とした。質問項目は実習について、記録について、グループワークについて、ゲスト講義についての主に講義内容に関する4カテゴリー項目30項目である。アンケートは全て4段階(とてもそう思う=4・ややそう思う=3・あまりそう思わない=2・まったくそう思わない=1)で回答を求めた。

統計的検定には、PASW18.0J for Windows を用いた。またアンケートの回答において全てもしくは一部に不適切な回答、欠損が見られたものは全て有効回答から除外した。

### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、本調査は全て統計的に処理され、いかなる場合においても回答した個人が特定されることはない、また本調査の実施の有無が科目の成績に影響することはないことを伝えた上で、アンケート用紙の提出を持って本調査に協力する事を承諾したこととするとして、調査に協力を求めた。

#### 4. 研究結果

30項目全体の平均は3.10であった。平均がもっとも高いものは「文章を書く練習は重要である」の3.65であり、次いで「ゲスト講師の話はためになった」3.56、「卒業後は資格を生かしていきたい」3.53と続いている。逆にもっとも平均が低かったものは、「実習に対する期待はなかった」の2.17であり、次いで「文章能力が高まった」2.28、「実習に対する期待はなかった」2.57と続いている。また平均が3以下の項目は、30項目中10項目と、全体の約33.3%であった。

次に各項目において男女に差がみられるかを確認した。各項目についてカイ二乗検定を行った結果、「グループワークに積極的に参加した」( $\chi^2(3)=12.363, p<.01$ )、「グループワークがしやすい教室だった」( $\chi^2(3)=9.725, p<.05$ )、「自分たちのクラスはいい質問が出来た」( $\chi^2(3)=9.373, p<.05$ )の3項目に有意に差がみられた。

#### 5. 考察

調査の結果、実習導入教育による実習に対する不安の除去は十分でないと考えられた。また必ずしも実習に対する期待を十分に高められたとは言い難いように思われる。しかし、将来は「福祉現場に就職したい」や「卒業後は資格を生かしていきたい」はどちらも高い数値で出ており、実習に対する不安と、社会福祉専門職としての意識が共に内包されている状況にあるように考えられる。

文章能力に関する項目については、書くという行為に対して非常に不安が強いことが見て取れる。今回の結果はリメディアル教育として、文章を書いて思いを伝えるという技術を習得させることの重要性を表しているように考えられる。

グループワークについては、ほとんどの項目で肯定的に受け止められているが、他人の意見を聞くことはできるが、自分の意見を伝えるという部分については苦手であるという傾向が見られた。

男女差については、殆どの項目で有意差が認められなかった。そのことから、導入教育から受ける影響については、男女差による影響はあまりないと考えられる。有意差が見られた3項目については、グループワーク、またグループワークによる成果に関する項目であったが、女性のほうが男性に比べグループワークを行ったことによる成果を肯定的にとらえているように思われる。